Child Social Preference Scale 日本語版の作成

岡田 涼¹ 日本障害者リハビリテーション協会 谷 伊織² 大西 将史³
中島 俊思 浜松医科大学 辻井 正次 中京大学

Development of a Japanese version of Child Social Preference Scale

Ryo Okada (*Japanese Society for Rehabilitation of Persons with Disabilities*), Iori Tani,
Masafumi Ohnishi, Shunji Nakajima (*Hamamatsu University School of Medicine*),
and Masatsugu Tsujii (*Chukyo University*)

This study developed a Japanese version of the Child Social Preference Scale, which measures children's social withdrawal. In addition, we examined developmental changes of children's withdrawal and the relationships between withdrawal and problematic behaviors. The participants were 7 012 mothers of preschool, elementary school, and middle school children. A factor analysis revealed a two-factor solution of shyness and social disinterest, which is consistent with previous studies. Shyness decreased as children's grade level increased. Social disinterest changed in a quadratic manner. The shyness score was lowest in the lower grades of elementary school. Shyness was related to more emotional symptoms, more peer relationship problems, and less prosocial behavior. Social disinterest was related to peer relationship problems. The importance of the distinction between shyness and social disinterest is discussed.

Key words: social withdrawal, shyness, social disinterest, developmental changes, problem behaviors.

The Japanese Journal of Psychology
2012, Vol. 83, No. 1, pp. 44-50

子どもの適応に強く影響するパーソナリティ特性の一つとしてシャイネス (shyness) がある。シャイネスは、評価を受けるような新奇な社会的場面において心配や不安を感じる傾向であり、社会的場面における接近-回避葛藤で特徴づけられる特性である (Coplan, Prakash, O'Neil, & Armer, 2004)。同年齢の他者との遊び場面や未知の大人との相互作用場面などにおいて、自ら積極的に関わろうとするか、あるいは関わりを避けようとするかといった行動面には個人差がある。このような社会的場面における行動の個人差を説明するパーソナリティ概念としてシャイネスは有効となる。

シャイネスは、社会的な側面や情緒的な側面での適応に対するリスク因子の一つであるとされている。シャイネスの高い子どもは、孤独感や社会的な不安などの内在化問題が多く、社会的コンピテンスや自尊感情が低いことが明らかにされている (Crozier, 1995;

Fordham & Stevenson-Hinde, 1999; Prior, Smart, Sanson, & Oberklaid, 2000)。Rydell, Diamantopoulou, Thorell, & Bohlin (2009) は、5-9 歳の子どものシャイネスと外在化問題、内在化問題との関連を検討している。その結果、シャイネスは内在化問題に対して正の影響を与える一方で、外在化問題に対しては負の影響を与えていた。また、Coplan, Arbeau, & Armer (2008) は、幼稚園児を対象とした縦断調査で、シャイネスの高さが数ヵ月後の内在化問題の多さや学校適応の低さを予測することを明らかにしている。

シャイネスに関する研究は、就学前の幼児や小学生児童を対象とした研究が多く、中学生以降を対象とした研究は比較的少ない。中学生以降の時期については、幼児期や児童期のシャイネスが、青年期や成人期における適応を予測することを示す縦断研究がみられる (Caspi, Bem, & Elder, 1988)。数少ない研究として、Asendorpf (2010) は、長期縦断調査を行い、23 歳時点でシャイネスが高い群はそうでない群に比べて、4-6 歳時点、10-12 歳時点、17 歳時点でのシャイネスが高いことを報告している。また、Kerr (2000) は、中学生時点でのシャイネスが 37 歳時点での自尊感情や主観的幸福感と関連することを示している。

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryo Okada, Faculty of Education, Kagawa University, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522, Japan (e-mail: ryooo@ed.kagawa-u.ac.jp)

¹ 現所属: 香川大学

² 現所属: 東海学園大学

³ 現所属: 福井大学

シャイネスは、子どもが引っ込み思案 (social withdrawal) になる理由の一つである。シャイネスの高い子どもは、社会的場面において不安や恐れを感じやすいために、仲間との相互作用を回避してしまう。しかし、シャイネス以外にも子どもが仲間との相互作用から退却する要因はある。Coplan et al. (2004) は、子どもの引っ込み思案の二つのタイプとして、シャイネスと社会的無関心 (social disinterest) を区別している。社会的無関心は、他者との相互作用に対する興味の欠如を示す側面である。シャイネスの高い子どもは、他者との相互作用に対して興味をもちながらも不安や恐れのために関わることができず、接近と回避が葛藤を生じている状態である。一方で、社会的無関心の高い子どもは、他者と関わろうとする欲求自体を欠いており、接近も回避も低い状態である。Coplan et al. (2004) は、就学前児を対象に、シャイネスと社会的無関心が自由遊び場面における行動とどのように関連するかを検討し、自発的な関わりや平行遊びなどの行動指標に対して両者が予測する側面が異なることを示している。シャイネスと社会的無関心は、いずれも子どもの引っ込み思案を捉える特性ではあるものの、概念的にも社会的行動に対する予測力においても異なっている。

シャイネスや社会的無関心は、子どもの社会的な側面や情緒的な側面での適応に影響する重要なパーソナリティの側面である。しかし、日本ではいまだ研究が少なく、シャイネスや社会的無関心がどのような要因と関連するかについて十分な検討がなされていない。Chen (2010) は、シャイネスを示す行動に対する価値づけは文化によって様々であるため、シャイネスと適応との関連も文化によって異なる可能性があることを指摘している。そのため、シャイネスや社会的無関心と適応との関連については、日本の子どもを対象とした研究が必要である。

子どものシャイネスは、他者評定によって測定されることが多い。特に、保護者評定によるシャイネスについて、多くの尺度が作成されている (Coplan & Rubin, 2010)。Coplan et al. (2004) は、保護者評定によって子どものシャイネスと社会的無関心を測定する Child Social Preference Scale (以下 CSPPS とする) を作成している。CSPPS は、3 歳から小学 2 年生にあたる 7 歳までに適用されている (Coplan et al., 2004; Coplan, Reichel, & Rowan, 2009)。また、数は少ないながらも中学生以降の対象者についても、保護者評定によってシャイネスを測定する研究があり、上述の Asendorpf (2010) では 17 歳の高校生、Kerr (2000) では 12—16 歳の中学生において母親評定によるシャイネスを用いている。しかし、日本では子どものシャイネスや社会的無関心を測定する保護者評定の尺度は存在しない。適切な測定尺度がないことが、日本にお

Table 1
回答者の内訳

	男子	女子	合計
年少	138	139	277
年中	155	142	297
年長	176	171	347
小 1	337	385	722
小 2	426	356	782
小 3	365	381	746
小 4	388	376	764
小 5	365	319	684
小 6	353	372	725
中 1	337	296	633
中 2	263	253	516
中 3	245	274	519
合計	3 548	3 464	7 012

ける子どものシャイネスの研究知見の少なさの原因の一つであると考えられる。

本研究では、子どものシャイネスと社会的無関心を測定する尺度として、CSPPS 日本語版を作成する。また、CSPPS 日本語版を用いて、シャイネスと社会的無関心の性差および発達差を検討することを目的とする。CSPPS について、海外の研究で性差は検討されているものの、幅広い年齢帯で年齢差や発達差を検討した研究はみられない。しかし、シャイネスや社会的無関心は、社会不安や社会的引きこもりなどの問題と関連しながら、児童期や青年期にわたって個人の適応や精神的健康に深く関わる個人特性である (Asendorpf, 2010)。そのため、日本の子どもにおいて、シャイネスと社会的無関心が性別や学年によってどのような特徴をもつのかを明らかにすることは、有意義な情報を提供するものといえる。共通の尺度を用いて、シャイネスと社会的無関心の性差および学年差を検討することは、各性別および学年ごとの標準値を示すという点で意義があると考えられる。加えて、本研究では問題行動との関連から、シャイネスと社会的無関心の特徴を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査協力者

A 県 X 市にある公立の保育園、小学校、中学校に通う子ども全数の保護者に対して調査を依頼した。回答用紙は、子どもの担任教諭を通じて保護者に配布した。回答の得られた協力者の中から母親の回答に限定し、また欠損値を含むデータを省き、最終的に 7 012 名のデータを分析対象とした。回答者の子どもの内訳を Table 1 に示す。

Table 2
CSPS 日本語版の因子分析結果と記述統計量

	F1	F2	Mean	SD
10. 私の子どもは、自分からは近づかず他の子どもたちを見ていることがよくある	.81	-.05	2.22	0.88
11. 私の子どもは、他の子どもと遊びたがっているようだが、ときどき他の子どもと関わることを不安に思ってしまう	.75	-.05	2.22	0.91
2. 私の子どもは、他の子どもたちと遊びたがっているようだが、ときどき一緒に遊ぶことに緊張してしまう	.70	.04	2.22	1.00
7. 私の子どもは、他の子どもたちが遊んでいると、仲間に加わらずに近くをうろうろする	.70	-.08	2.27	0.89
5. 私の子どもは、“恥ずかしがり屋”なので、他の子どもからの誘いを断ってしまう	.66	.03	1.89	0.79
8. 私の子どもは、他の子どもと一緒に何かの遊びを始めることはほとんどない	.59	.05	1.83	0.73
6. 私の子どもは、他の子どもと遊ぶうとして自分から近づいていくことがよくある ^{a)}	-.49	-.03	3.38	0.92
1. 私の子どもは、しばしば 1 人で遊ぶことに満足しているようだ	.00	.69	3.18	1.02
3. 私の子どもは、1 人で静かに遊んでいるときも、グループで遊んでいるときと同じくらい幸せそうだ	-.18	.61	3.34	1.02
9. 私の子どもは、どちらか選ぶことができるなら、1 人でのいるよりも他の子どもと一緒に遊びたがる ^{a)}	-.27	-.42	3.89	0.89
4. 私の子どもは、他の子どもたちと一緒に遊んでいるときが一番幸せそうだ ^{a)}	-.18	-.38	3.79	0.87
因子間相関		.39		

^{a)}逆転項目。

尺 度

シャイネスと社会的無関心 Coplan et al. (2004) が作成した CSPS を、原著者の許可を得たうえで日本語に翻訳して使用した。翻訳にあたっては、臨床心理学、発達心理学を専門とする研究者と臨床心理士複数名が項目表現を確認しながら翻訳を行い、また調査協力園の保育士および調査協力校の教員とともに保護者が回答しやすい表現について協議し、最終的な尺度項目として確定した。CSPS は、社会的場面における子どもの行動を測定する保護者評定の尺度であり、シャイネス (shyness : 7 項目) と社会的無関心 (social disinterest : 4 項目) の 2 下位尺度からなる。教示は、“あなたのお子さんの行動について、それぞれの質問にお答えください。それぞれの項目について、もっともあてはまる数字一つに○をつけてください。項目に示されている内容を、すべての状況で示すわけではないと思いますが、なるべく普段の一般的な行動について考えて回答してください”であり、各項目に対して“全くあてはまらない (1 点)”“とてもあてはまる (5 点)”の 5 件法で回答した。

問題行動 子どもの問題行動を測定するために、Goodman (1997) が作成した Strength and Difficulties Questionnaire (以下 SDQ とする) を用いた。SDQ は、子どもの問題行動のスクリーニングのために開発された尺度であり、情緒、行為、多動・不注意、仲間関係、向社会性の 5 下位尺度からなる (各 5 項目)。また、向社会性以外の 4 下位尺度の合計得点から困難度

全体得点が算出される。この尺度は、各国の言語に翻訳されたものが web 上で公開されており、日本語版も研究で使用されている (Matsuishi, Nagano, Araki, Tanaka, Iwasaki, Yamashita, Nagamitsu, Iizuka, Ohya, Shibuya, Hara, Matsuda, Tsuda, & Kakuma, 2008)。保護者は、自分の子どもの行動について、“あてはまらない (0 点)”“まああてはまる (1 点)”“あてはまる (2 点)”の 3 件法で回答する。向社会性のみ高得点ほど問題行動が少ないことを示し、その他の 4 下位尺度については得点が高いほど問題行動が多いことを示す。尺度の妥当性と信頼性については、先行研究で確認されている (Goodman, 2001)。

倫理的配慮

本研究は、浜松医科大学と X 市との間で交わされた研究と支援に関する協定に基づいて行われ、個人情報保護は X 市のセキュリティポリシーを遵守することで十分な倫理的配慮のもとに実施された。質問紙への回答は、調査趣旨を理解して研究協力に同意した者のみが行った。

結 果

CSPS 日本語版の尺度構成

CSPS 日本語版について、全 11 項目の平均値と SD を算出した (Table 2)。平均値 $\pm 1SD$ を基準として床効果と天井効果を検討したところ、すべての項目で床効果と天井効果はみられなかった。続いて、11 項

Table 3
性別×学年ごとの CSPS 日本語版得点

	シャイネス				社会的無関心			
	男子		女子		男子		女子	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
年少	15.92	4.83	16.30	4.57	11.35	2.06	11.45	2.05
年中	16.08	4.41	16.02	4.11	11.45	2.19	10.96	2.34
年長	15.14	4.74	16.12	4.65	10.77	2.61	10.95	2.36
小1	15.40	4.52	15.87	4.73	11.12	2.65	10.79	2.30
小2	15.36	4.56	15.72	4.51	10.63	2.63	10.40	2.56
小3	14.76	4.69	15.85	4.50	10.47	2.70	10.82	2.64
小4	14.51	4.40	15.74	4.40	10.26	2.57	10.86	2.53
小5	14.53	4.51	15.71	4.12	10.57	2.73	10.93	2.64
小6	14.45	4.09	15.53	4.51	10.52	2.81	11.11	2.58
中1	14.36	4.56	15.40	4.06	10.82	2.90	11.01	2.64
中2	14.48	4.06	15.10	4.12	11.42	2.69	11.04	2.71
中3	14.57	4.14	15.43	4.03	10.91	2.76	11.14	2.73

目に対して原尺度と同様に2因子を仮定して主因子法による因子分析を行った。第1因子の固有値は4.18、第2因子の固有値は1.54であった。プロマックス回転後の因子負荷量をTable 2に示す。第1因子には、“私の子どもは、自分からは近づかずに他の子どもたちを見ていることがよくある”“私の子どもは、他の子どもと遊びたがっているようだが、ときどき他の子どもと関わることを不安に思ってしまう”などの7項目の負荷量が高く、第2因子には、“私の子どもは、しばしば1人で遊ぶことに満足しているようだ”“私の子どもは、1人で静かに遊んでいるときも、グループで遊んでいるときと同じくらい幸せそうだ”など4項目の負荷量が高かった。負荷量の高い項目の構成は、原尺度と同様であったため、第1因子を“シャイネス”因子、第2因子を“社会的無関心”因子とした。因子間相関は.39であった。それぞれ負荷量の高い項目群で下位尺度を構成し、 α 係数を算出したところ、シャイネスが.85、社会的無関心が.63であった。

因子の妥当性の検討

CSPS 日本語版の因子の妥当性を検討するために、探索的因子分析で得られた2因子を想定して確認的因子分析を行った。修正指数に基づいて、項目誤差間に一つの共分散をおいた。その結果、 χ^2 値は有意であったものの ($\chi^2(42) = 1842.31, p < .001$)、GFI = .95、AGFI = .92、CFI = .93、RMSEA = .08 という適合度を示した。そのため、一定の因子の妥当性が示されたと判断した。

また、性別と年齢によって因子構造が異なる可能性について、多母集団同時分析による確認的因子分析を用いて検討した。男女間で同じ2因子モデルを想定

し、すべての因子負荷量と因子間の共分散に等値制約をおいた。その結果、 χ^2 値は有意であったものの ($\chi^2(95) = 1937.16, p < .001$)、GFI = .95、AGFI = .93、CFI = .92、RMSEA = .05 という適合度を示したため、男女のいずれにおいても2因子モデルは妥当であると判断した。次に、子どもの年齢群による違いを検討した。先行研究では、CSPS は3歳から小学2年生の7歳まで適用されている (Coplan et al., 2004, 2009)。そこで、本研究では、年少から小学2年生、小学3年生から6年生、中学1年生から3年生の3群にわけて分析を行った。三つの年齢群に同じ2因子モデルを想定し、すべての因子負荷量と因子間の共分散に等値制約をおいた。その結果、 χ^2 値は有意であったものの ($\chi^2(146) = 1776.09, p < .001$)、GFI = .95、AGFI = .94、CFI = .93、RMSEA = .04 という適合度を示したため、いずれの年齢群においても2因子モデルは妥当であると判断した。

CSPS 日本語版の性差および学年差

子どもの性別×学年ごとのCSPS 日本語版の得点をTable 3に示す。各下位尺度得点に対して、子どもの性別×学年の2要因分散分析を行った。シャイネスについては、性別の主効果 ($F(1, 6988) = 46.34, p < .001$)、学年の主効果 ($F(11, 6988) = 4.25, p < .001$) が有意であり、交互作用は有意ではなかった ($F(11, 6988) = 1.06, ns$)。性別の主効果については、男子よりも女子の方が高かった。学年の主効果については、年少と年中が小6、中1、中2よりも高く、年少が中3よりも高かった。社会的無関心については、学年の主効果 ($F(11, 6988) = 5.53, p < .001$) と交互作用 ($F(11, 6988) = 3.03, p < .001$) が有意であった。性別の主効果は有

Table 4
CSPS 日本語版と SDQ との相関係数

	情緒	行為	多動・不注意	仲間関係	向社会性	困難度
シャイネス	.40***	.09***	.09***	.45***	-.21***	.35***
社会的無関心	.11***	-.02*	-.04**	.34***	-.09***	.12***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

意ではなかった ($F(1, 6988) = 2.20, ns$)。性別の単純主効果は、小 4 ($F(1, 6988) = 10.00, p < .01$) と小 6 ($F(1, 6988) = 9.26, p < .01$) にみられ、いずれも男子より女子の方が高かった。学年の単純主効果は、男子 ($F(11, 6988) = 6.09, p < .001$) と女子 ($F(11, 6988) = 2.43, p < .01$) のいずれにもみられた。男子では、中 2 が小 3、小 4、小 5、小 6 より高く、年少が小 3 と小 4 より高く、小 1 が小 4 より高く、中 2 が小 2 より高かった。女子では、年少、小 6、中 3 が小 2 より高かった。

CSPS 日本語版の変化の傾向を調べるために、子どもの学年を説明変数とする重回帰分析を行った。子どもの学年に 1 から 12 の数値を割り当て、一次の項と二次の項を説明変数とした。シャイネスに対しては、性別を統制したうえで分析を行った。その結果、一次の項は有意な負の値を示したが ($\beta = -.17, p < .01$)、二次の項は有意ではなかった ($\beta = .09, ns$)。社会的無関心については、分散分析において交互作用がみられていたので、男女ごとに分析を行った。男子では、一次の項 ($\beta = -.47, p < .001$) と二次の項 ($\beta = .46, p < .001$) の両方が有意であった。女子でも、一次の項 ($\beta = -.21, p < .01$) と二次の項 ($\beta = .24, p < .01$) の両方が有意であった。

CSPS 日本語版と SDQ との関連

SDQ について、下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、情緒が .65、行為が .55、多動・不注意が .76、仲間関係が .56、向社会性が .74 であった。全体的にやや低い値であったが、SDQ は世界的に標準化された尺度であるため、原尺度に従って下位尺度を構成した。

CSPS 日本語版と SDQ との関連は以下のように予想される。シャイネスと社会的無関心は、いずれも対人面での消極性を示すものであるため、仲間関係と正の関連を示すことが予想される。また、シャイネスは、他者と関わりたいと思いつつも関わるができないというアンビバレントな側面を捉えるものであるため、情緒と正の相関を示すことが予想される。一方、社会的無関心は、他者と関わらないことに葛藤を生じるものではないため、情緒との関連は低いことが予想される。シャイネスと社会的無関心のいずれも、

行為、多動・不注意とは関連が弱いと予想される。以上の予想から、4 下位尺度の合計として定義される困難度については、シャイネスが比較的強い正の相関を示し、社会的無関心は比較的弱い正の相関を示すと予想される。

日本語版 CSPS と SDQ との相関係数を Table 4 に示す。予想と一致して、シャイネスは情緒 ($r = .40, p < .001$)、仲間関係 ($r = .45, p < .001$) と中程度の正の相関を示し、向社会性 ($r = -.21, p < .001$) と弱い負の相関を示した。行為 ($r = .09, p < .001$)、多動・不注意 ($r = .09, p < .001$) とはほぼ無相関であった。困難度とは、中程度の正の相関を示した ($r = .35, p < .001$)。社会的無関心については、予想と一致するかたちで、情緒との相関は弱く ($r = .11, p < .001$)、仲間関係とは中程度の正の相関を示した ($r = .34, p < .001$)。しかし、予想に反して、向社会性とはほぼ無相関であった ($r = -.09, p < .001$)。行為 ($r = -.02, p < .05$)、多動・不注意 ($r = -.04, p < .01$) とはほぼ無相関であった。困難度とは、弱い正の相関を示した ($r = .12, p < .001$)。なお、確認的因子分析を行った際と同様の 3 群ごとに相関係数を算出したところ、群間で相関係数に大きな差はみられず、いずれの下位尺度についても相関係数の差はすべて .11 以下であった。

考 察

本研究では、保護者評定によるシャイネスと社会的無関心の測定尺度を作成し、発達差と性差および問題行動との関連について検討した。海外の多くの研究で用いられている CSPS を翻訳し、約 7000 名の保護者に実施した。得られたデータに対して因子分析を行ったところ、先行研究 (Coplan et al., 2004) と同様の 2 因子が抽出された。一つ目の因子はシャイネスであり、社会的場面で接近と回避の葛藤を感じるものである。二つ目の因子は社会的無関心であり、接近動機も回避動機も生じていないものである。いずれも子どもの引っ込み思案を捉える概念であるが、接近と回避の葛藤の有無という点で異なる。

シャイネスと社会的無関心の二側面について、性差と学年差を検討した。シャイネスについては、学年を通じて男子よりも女子の方が高かったが、男女のいずれにおいても学年が上がるにつれて低下していく傾向

がみられた。年齢が上がるとともに自己の行動や感情をコントロールする能力が高まるにつれて、接近と回避の葛藤をうまく処理できるようになるため、行動面にシャイネスが表れにくくなるものと考えられる。一方、社会的無関心については、男女いずれにおいても幼児期においては高く、小学校低学年頃に一度低下し、再び高まっていくという非線形的な変化の傾向がみられた。ただし、最初の低下は女子の方が低年齢で生じており小学2年生でもっとも低くなっているが、男子においては小学4年生でもっとも低くなっていた。幼児期から児童期にかけて、他者への興味や子どもにとっての仲間関係の重要さが高まるとともに、社会的無関心は低下していくが、児童期から青年期に移行していく過程で自己に対する関心が高まることで、他者や社会への関心が薄れていく側面があり、それに伴って社会的無関心が再び高まるものと考えられる。また、本研究の結果は、このようなU字型の変化が、男子よりも女子においてより早く現れることを示している。幼児期における他者への興味の高まりや、青年期初期における自己への関心の高まりが、男子よりも女子において比較的早く生じるのかもしれない。

CSPS 日本語版と子どもの問題行動を捉える SDQ との関連を検討したところ、シャイネスと社会的無関心では異なる関連性がみられた。シャイネスと社会的無関心のいずれも、仲間関係の問題とは正の関連があった。いずれも対人面での消極性を示すものであるため、消極的な子どもは保護者からみた場合に仲間関係に問題があると捉えられるものと考えられる。しかし、情緒面での問題との関連には違いがみられた。この関連の違いは、シャイネスと社会的無関心における内面の葛藤の有無を反映しているものと考えられる。シャイネスは中程度の関連を示したものの、社会的無関心はほとんど関連を示さなかった。シャイネスの高い子どもは、他者と関わりたい気持ちをもちながらもそうすることができないために内面で葛藤を生じ、情緒的な問題を生じていると考えられる。一方で、社会的無関心の高い子どもは、他者と関わらないことに対して葛藤を感じないために、特に情緒的な問題を生じることはないものと考えられる。全体的な困難度との相関は、社会的無関心よりもシャイネスの方が強かったため、シャイネスの高い子どもは保護者から問題があると捉えられやすいが、社会的無関心の高い子どもは、それほど問題があるとはみられていないものと考えられる。ただし、長期的にみた場合には、社会的無関心の高さも不適応的な結果につながる可能性もある。他者との関係に興味を示さず、自分から関わろうとしなければ、仲間集団からの拒絶や排斥につながる場合がある (Coplan & Armer, 2007)。社会的無関心がどのような結果を生じるのかについては、長期的な視点を含めてさらに検討することが必要である。

これまで日本においては、子どものシャイネスに関する研究は少なく、シャイネスがどのように発達的に変化するのか、またどのような要因と関連するのかについて明らかにされていなかった。同様に、引っ込み思案のもう一つのタイプである社会的無関心についても、日本ではほとんど検討されてこなかった。その一つの原因は、適切な測定尺度が存在しなかったことにあると思われる。本研究で保護者評定によってシャイネスと社会的無関心を測定する尺度を作成したことによって、子どもの引っ込み思案を捉え、実証的に検討することが可能になった。今後、本研究で作成した CSPS 日本語版を用いて、子どものシャイネスが社会適応や精神的健康に対してどのような影響を及ぼしているのかについて検討していくことが必要である。

一方で、本研究の知見は保護者評定によって得られた結果であるという点には十分注意する必要がある。CSPS は、先行研究においては、3歳から7歳の子どもに対して適用されているが (Coplan et al., 2004, 2009)、それ以上の年齢の子どもに適用された例はない。本研究では、8歳以上の子どもにおいても確認的因子分析の結果から因子的妥当性が示された。また、CSPS 以外の尺度を用いた研究ではあるものの、中学生以上の子どものシャイネスを保護者評定で測定している研究もある (Asendorpf, 2010; Kerr, 2000)。しかし、一般的には子どもの年齢が高くなるほど、保護者からは子どもの特徴がみえにくくなり、保護者評定と子どもの内面的な特徴との間にずれが生じる部分も大きくなる可能性が考えられる。本研究では、幅広い年齢帯のなかでシャイネスと社会的無関心の発達の特徴を捉えるために、保育園児から中学生まで共通して保護者評定による測定を行ったが、高学年の子どもに関しては、自己評定などの異なる方法を用いてさらに多面的に検討することが必要である。

今後の重要な課題として、CSPS 日本語版の妥当性と信頼性をさらに慎重に検討していく必要がある。年齢が上がるとともに、子どもの行動は保護者からみえにくくなるものと思われる。本研究のデータでは、小学校高学年や中学生においても、ある程度の分散があったため、引っ込み思案に関する個人差をある程度測定できているものと考えられるが、CSPS 日本語版の妥当性について検討することは、今後の重要な課題の一つである。特に、教師による評定や本人の自己評定の指標あるいは観察による行動指標などの関連から、基準関連妥当性を検討することが、尺度の適用可能性を示すうえで必要である。また、信頼性についても、本研究では内的整合性の観点から示されたのみであり、社会的無関心については $\alpha = .63$ とやや低い値であった。再検査信頼性など他の観点からも信頼性を検証することが求められる。

引用文献

- Asendorpf, J. B. (2010). Long-term development of shyness: Looking forward and looking backward. In K. H. Rubin & R. J. Coplan (Eds.), *The development of shyness and social withdrawal*. New York: Guilford Press. pp. 157-175.
- Caspi, A., Bem, D. J., & Elder, G. H., Jr. (1988). Moving away from the world: Life-course patterns of shy children. *Developmental Psychology*, **24**, 824-831.
- Chen, X. (2010). Shyness-inhibition in childhood and adolescence: A cross-cultural perspective. In K. H. Rubin & R. J. Coplan (Eds.), *The development of shyness and social withdrawal*. New York: Guilford Press. pp. 213-235.
- Coplan, R. J., Arbeau, K. A., & Armer, M. (2008). Don't fret, be supportive! Maternal characteristics linking child shyness to psychosocial and school adjustment in kindergarten. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **36**, 359-371.
- Coplan, R. J., & Armer, M. (2007). A "multitude" of solitude: A closer look at social withdrawal and nonsocial play in early childhood. *Child Development Perspectives*, **1**, 26-32.
- Coplan, R. J., Prakash, K., O'Neil, K., & Armer, M. (2004). Do you "want" to play? Distinguishing between conflicted shyness and social disinterest in early childhood. *Developmental Psychology*, **40**, 244-258.
- Coplan, R. J., Reichel, M., & Rowan, K. (2009). Exploring the associations between maternal personality, child temperament, and parenting: A focus on emotions. *Personality and Individual Differences*, **46**, 241-246.
- Coplan, R. J., & Rubin, K. H. (2010). Social withdrawal and shyness in childhood: History, theories, definitions, and assessments. In K. H. Rubin & R. J. Coplan (Eds.), *The development of shyness and social withdrawal*. New York: Guilford Press. pp. 3-20.
- Crozier, W. R. (1995). Shyness and self-esteem in middle childhood. *British Journal of Educational Psychology*, **65**, 85-95.
- Fordham, K., & Stevenson-Hinde, J. (1999). Shyness, friendship quality and adjustment during middle childhood. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **40**, 757-768.
- Goodman, R. (1997). The Strength and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **38**, 581-586.
- Goodman, R. (2001). Psychometric properties of the Strength and Difficulties Questionnaire. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **40**, 1337-1345.
- Kerr, M. (2000). Childhood and adolescent shyness in long-term perspective: Does it matter? In W. R. Crozier (Ed.), *Shyness: Development, consolidation and change*. London: Routledge. pp. 64-87.
- Matsuishi, T., Nagano, M., Araki, Y., Tanaka, Y., Iwasaki, M., Yamashita, Y., Nagamitsu, S., Iizuka, C., Ohya, T., Shibuya, K., Hara, M., Matsuda, K., Tsuda, A., & Kakuma, T. (2008). Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain and Development*, **30**, 410-415.
- Prior, M., Smart, D., Sanson, A., & Oberklaid, F. (2000). Does shy-inhibited temperament in childhood lead to anxiety problems in adolescence? *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **39**, 461-468.
- Rydell, A. M., Diamantopoulou, S., Thorell, L. B., & Bohlin, G. (2009). Hyperactivity, shyness, and sex: Development and socio-emotional functioning. *British Journal of Developmental Psychology*, **27**, 625-648.

—— 2011. 3. 30 受稿, 2011. 11. 5 受理 ——